仕事人秘録

二度とないドラマ ⑫

創徳企業情報社長
宇都宮　徳治氏

M&A専念 創業を決意

一九九八年一月末、宇都宮氏は自主廃業への作業を進めていた山一証券を後にする。

解雇通知が出たのは九七年十二月末だった。社員を三グループに分け、残務が整理できた者から順に退職するのだが、公開引受部にいた私は第一陣に入った。金融不安の嵐が吹き荒れる中では、すぐに再就職先など見つからない。住宅ローンや教育費を抱えていた同僚の悩みは深刻だった。

だが、私はすっきりした気分だった。この二十年間、自ら希望して証券業務を一通り経験した。上司とのあつれきに悩み、妥協も迫られたが、よって立つ瀬がなくなった途端、自分の生涯をかけるべき仕事がはっきり見えた。企業の合併・買収（M&A）だった。

十二月、かつてディールを求めて二人三脚で全国を駆け回った田村耕太郎君（現・参院議員）の取り持ちで、私は山一OBの鮎川純太氏に会った。旧日産コンツェルンの創始者、鮎川義介氏の孫で、父弥一氏が育てたベンチャーキャピタル（VC）、テクノベンチャーの社長を務めていた。

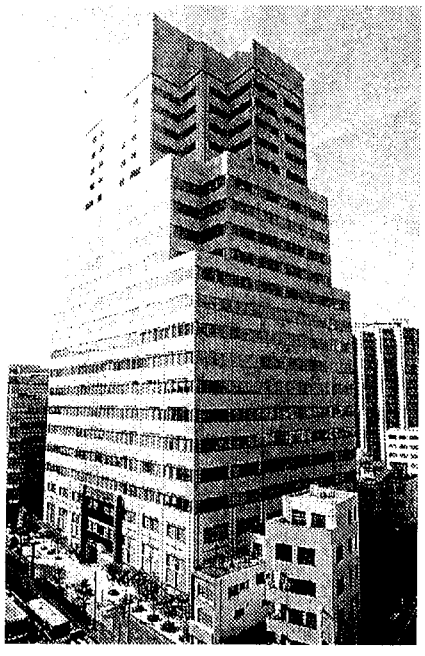
鮎川氏は私を迎え入れ、M&Aの仲介業務を始めようと考えていた。私の経験を買ってくれる鮎川氏の申し出は本当にありがたかった。私はテクノベンチャーに移籍することにした。

企業開発部時代と同じように、経営者の訪問を再開した。もう山一時代のように古参に気兼ねする必要もない。久しぶりの会社回りは楽しかった。

自由に動き回れる場を得て、私は理想の組織とは何かを考え始めた。山一のような巨大組織では、やりたい仕事など二の次で、諸事うまく立ち回る者が出世していった。生まれつき不器用で人見知りし、札幌支店時代の営業経験で何とか人と付き合う術を身につけた私にとって、そんな器は合うわけがなかった。

小さな器でもいい。理解し合える仲間を集め、生涯の仕事に打ち込んでみたい。そんな思いが日増しに強くなっていった。山一時代には会社を飛び出すチャンスに巡り合うたびに「今の人脈ではまだ独り立ちできない」と自分で理由を付け、踏みとどまってきた。しかし、今では人脈はある。M&Aでは、一発長打を飛ばさない限り利益を得られない怖さも分かっている。

九八年十二月のことだ。会社がある東京・一番町を歩いていると、この辺りでは珍しい、路上で演奏する音楽家とすれ違った。彼が奏でるモーツァルトの「ソナチネ」に耳を傾けていると、「会社を起こせ」と語りかけてくるように聞こえ始めた。自分がそこまで思い詰めていることを悟り、起業を決意した。考え抜く機会を与えてくれた鮎川氏に感謝の念と独立の腹を固めたことを伝えた。



山一証券には20年勤めた
（東京・中央区の旧本社ビル、1999年6月）